

Title	雑誌『郷土研究』の再刊
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.2 (1931. 6) ,p.169(327)- 170(328)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310600-0170">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310600-0170</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書

# 評

## 聖地紀行

(占部百太郎著)  
大岡山書店發行

本書は占部博士が昭和四年の秋「聖地」を中心とした地中海沿岸各地を旅行された時の記事であつて、旅行の動機とその用意から筆を起し、マルセイユ出發、ナポリ、ボンベイのイタリヤから、アテネ、サラミスのギリシヤにうつり、更にコンスタンチノープル、スミルナ、ローツ島、メルシナを経て、ベイルート、ドッグ、リヴァー、パールベック、ダマスクス、タイベリアスミカパアナウム、カナ、ナザレ、ハイファとカーメル山、ナブルス、セルサレム、ベスレヘム、ゼリコなどの聖地方を巡遊し、更に南下してカンタラからエジプトに入り、カイロ、アレクサンドリヤからマルセイユに歸來するまでの大旅行の見聞を日記體に叙述されてゐる。そこにはエジプト、アッシリヤからギリシヤ、ローマにいたる古代文化の展望や、イエスを中心とするヘブライ宗教の回顧があり、更に聖地に於ける史蹟發掘の視察や、或は現下の重大な民族問題たる Zionist の運動についての論評がある。なにしろ西洋文明の發源地であり、『乳と蜜の流るる地』として古代民族の憧憬の地であつたこれらの地方は、西洋史の専門家はもろろんのこと、一般の人々にさつても、最も興味あるところとして、大いにその

旅情をそよるのであるけれども、種々の困難のために實際に踏査する人は極めて少く、その紀行文のごさきに至つてはなほ更少い。評者もまた見學の希望をもちながら、果し得なかつた一人であつて、せめて興多き紀行文にでも接したいと思つてゐたところ、今本書によつてその渴望を満すことのできたのは誠に幸である。卷中鮮明なる寫眞版が多数あり、今後の流行者にさつてよき指針であるさきにも、また鎖夏の好讀物としてふさはしく、附録の「大憲章とランニミード」と「再び英國に直面して」の二編もまた、博士の英國通を示すところの味ふべき旨である。(松本芳夫)

## 雜誌『郷土研究』の再刊

大正二年二月から大正六年三月まで、僅か四ヶ年の間にすぎなかつたけれども、『郷土研究』がわが學界に與へた影響はおびただしいものであつて、その功績はいまさらこゝに喋々するまでもない。今日わが國にも郷土研究家或は民俗學者が數多く現はれ、誠に斯界の盛大を思はせるけれども、それらの學者達も皆直接間接『郷土研究』の指導や刺戟をうけたものさ言つて過言でない。それが編輯者の都合で一旦休刊してゐたところ、十數年を経て再び復活したことは、わが學界のため誠に慶賀にたえず、衷心からその發展を祈る次第である。第五卷第一號には、石手紙考(藤原相之助)、おしら神の考察(田村浩)、馬首飛行譚(佐々木喜善)、第二號には、襦衣考(宮本勢助)、坂田金時(松岡靜雄)などの諸論文を始め、

其他多くの報告、記事がある。しかしながら舊郷土研究が斯界の王座を占めてゐた十數年前と異つて、すでに類似の雜誌も數種刊行されてゐる今日、それらにはまた夫々独自の境地があるにしても、昔の光輝ある歴史を保ち、新しき復活の意義を充分に發揚するためには、編輯者の倍舊の努力をこひねがはざるを得ない。

(松本芳夫)

### 標註古風土記 出雲

(栗田寛纂註  
大岡山書店發行)

最近古典研究のさかんになつて、從來比較的閑却されたかのごとき觀のあつた古風土記が、次第に研究されようとする傾向のあらはれたのは注意すべきことであつて、すでに松岡靜雄、井上通泰、倉野憲司諸氏の播磨風土記に關する論著が公にされた。がそれにつけても栗田寛の標註古風土記が古風土記研究において最も重じられてゐることは、いまさることはいふまでもないことである。さきに常陸の部が複製され、今また出雲の部が複製されたことは誠によろこびに耐えない。さうして前者と同じく栗田寛の纂註に對して、後藤藏四郎氏が補註を加へられたものである。後藤氏はすでに出雲風土記考證の著があつて、出雲風土記研究の一方の權威であるから、本書の價値は更に加はるものと言はねばならぬ。(松本芳夫)

### 三條西榮花物語

(三條西公正校訂  
岩波文庫)

榮花物語は御堂關白道長の榮華を中心とせる宮廷生活の敘述を

旨とした貴重な歴史的文學である。著者が多種多樣極めて複雑な雲上の日常生活をよく把握して、之れを文學的に記述した處に、その特徴があり、又伊勢物語や源氏物語の後に公にされたにも拘らず、獨得の地位を保持する所以であらう。

我が國史並に國文學史の上、不朽の人物である三條西實隆公の後裔にあたる公正氏は、今次、實隆公以來傳襲の榮華物語を校訂上梓せられた。寔に學界のため欣喜すべき慶事である。同本は十七冊本で、初め十冊は大本、鳥の子の類を纏めて冊子となし、後七冊は小本、斐紙を胡蝶糊にしたものであり、其の筆致並に料紙等より推定して、大本は王朝末期頃の筆らしく、外題に榮花物語と書かれ、小本は鎌倉中期を下らぬ書寫の如く、外題に世繼と書かれ、又大本は明瞭に三人位の分寫で、小本は一手であること云ひ、現存同本中最古のものに稱せられ極めて貴重なものである。

本書の傳來は實隆公の日記、永正六年十一月四日に「榮花物語十七冊」と手入の記事と思はるゝものが見え、八日に「榮花物語代冊全」と、又永正八年三月十日に「榮華物語吉々年物百今日遣之」と、又永正八年九月五日に「兼又榮花春今日終一覽切……」と、猶ほ文龜三年九月五日に「兼又榮花物語、續世繼本有沽却本東山殿御本也共以美麗、尤所望之物也」とあつて、恐らく永正六年入手のものを指すものと思考せられる記事も見え極めて、由緒正しきものなる事が推考せられる。

從來、この物語は著者一人説と二人以上説とがあり、又其の分界を三十帖となし、其れ以前を上巻、後を下巻として居るが、公正氏はこれに對して、本書巻頭の解説中に於て、新説を試みられ